

敢えて企業経営者に問う “若者のバリュースアップ” —その2

小泉 鐵夫 (こいずみ てつお) SEF コミュニケーション研究会

今、なぜ“若者のバリュースアップ”か？

1. 現状を是認するのか！

前号で、世相、若者、企業それぞれの実態に関する私見を述べた。果たして、読者諸氏の共感を得られたのか、不安である。「筆者の現状認識は間違っている」とのご指摘は真摯に受け止めたいと思うが、「この現実がなぜ悪い！」の声も予想されるので、あらかじめの反論を試みておきたい。

- ① 「こんな世相」と言うけれど、平和でソコソコ豊かに、世界一の長寿を満喫しているではないか。
- ② 「こんな若者」と言うけれど、どんな時代の大人にも、若者は頼りなくてダメに見えるものさ。
- ③ 「こんな企業」と言うけれど、今はグローバル化時代、古いやり方では世界に通じやしないよ。

平均的な現状是認論はこんなところであろうと想像できる。一見ごもっともなご意見とも思えるが、果たしてそうだろうか？

- ① 真の意味での平和、豊かさ、長寿なのだろうか？ よしんばそうであっても、それは戦後60年にわたる“和風資本主義”の成果であり、その崩壊後まで、それらは保証されるものだろうか？
- ② “物分かりの良い大人”を演じるのは容易で

あるが、本当に若者を放っておいて良いのだろうか？ われわれの若い時は、大人から叱られたり、諭されたりしたものだが…。

- ③ 経済のグローバル化とは、欧米の流儀を直輸入することなのだろうか？ 資本、資源、国土で著しく劣っていても、同じ流儀で国際競争に勝てるのだろうか？

すでに現場から離れた筆者の心配が、的外れの杞憂に終わることを願いつつ、自身の現認識に基づき本稿を進めさせていただく。

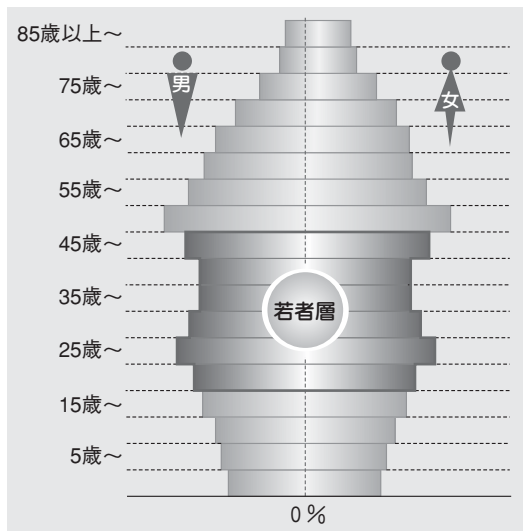
2. 若者のバリュースアップ

(1) 若者の定義

論点を明確にするため、筆者の言う「若者」の年代層を申し上げておこう。世代の分類法はさまざまなものがあるが、ここでは、1960年代以降に誕生した人たちを「若者」と呼びたいと思う。かなり幅広い層になり、40歳を超えても若者なのか？と、違和感のある読者もあろうが、筆者は、そのあたりに世代間の大きな溝があるのではないかと思う。1960年代以降で、いくつかの世代に分けるべきかもしれないが、煩雑さを避けて、あえて一括りにさせていただく。ちなみに筆者は、1939（昭和14）年生まれの68歳である。

(2) “若者のバリュースアップ”は喫緊の国家的テーマである

筆者の問題意識に関し、切り口を世相、若者、企業の三つに分け、述べてきた。いずれも単独で発生した現象ではなく、相互に絡み合う複合



的産物であることは言うまでもない。

企業の変質を世相が歓迎した場面もあった。世相と企業がアダムとイヴとなり、禁断の果実を手にしたとき、ことが始まったとも言える。その世相と企業が産み出した若者が、新型の世相と企業をリードし始めている傾向も見受けられる。そのようなことから、いずれが元凶かを断じることは困難であり、かつ無意味であるとさえ思われる。唯一断言できるのは、「新型若者が先にありき」ではなかったということであり、新型若者は、世相と企業が産み落とした卵が孵化したモノだということである。

今、われわれが認識すべき最大の課題は、「日本の将来は新型若者の手に委ねられている」という自明の現実である。団塊世代の少し後には、新型若者たちが控えているのである。前述のごとき世相と、企業の実態に囲まれた日本の中核に、新型若者が座ることを想像していただきたい。筆者には、団塊世代の現役引退が企業崩壊を引き起こし、ひいては日本崩壊の起爆剤となりかねないと思えるのである。それが「敢えて企業経営者に問う」を本稿の表題にした所以である。

われわれ（ほぼ戦前戦中生まれ）世代の「現況に対する責任」は後述するが、ここでは反省と焦燥の思いを綯い交ぜて、“若者のバリューアップ”を訴える次第である。そのためには、世相・企業の矯正が、同時並行的または先行的に断行されることが前提となるのは言うまでもない。さて、“若者のバリューアップ”の具体策に入る

前に、もう一度若者と対峙することにより、筆者の問題意識を明確にしておきたいと思う。

（3）若者への訴え

敢えてマイナス面のみに着目し、直接若者に問い掛けてみる。

◆「恥ずかしくないのかい？ 自尊心って知ってるかい？」

—先生が、学校が悪い／悪かった

…「それでは自分は何をした？」

—上司が、会社が悪い／悪かった

…「それでは自分は何をした？」

—政治が、社会が悪い／悪かった

…「それでは自分は何をした？」

—ウンが、ツキがない／悪かった

…「それでは自分は何をした？」

—俺なりにベストを尽くした

…「単なる逃げじゃないのか？」

—何もこの俺がやらなくても

…「君のやることはあるのか？」

—好きでニートしているわけではない

…「好きなことはあるのか？」

◆「都合の良いことだけ言うな！ 自律心って知ってるかい？」

—法律に書いてあるのか？

…「法の精神を考えたことがあるのか？」

—この程度ならいいか

…「程度の基準にするものがあるのか？」

—みんながやっているから

…「みんなが死んだら死ぬのか？」

—バレなきゃいいだろう

…「それが悪だと知っていても？」

—バレたらバレた時のこと

…「バレた時は責任を取れるのか？」

—いずれ何とかなるはずだ

…「当てが外れた場合を考えたのか？」

—俺のことは放っておいてよ

…「どんな時でもそれでいいのか？」

このあたりで若者の反論を得たいところであるが、誌上ということもあり、一方的な発言とならざるを得ず残念に思う。しかし、一方的な発言が、批判だけにならぬよう、若者に実現して欲しい「より良き人間社会」に関し、次に筆者の存念を述べさせていただきます。

——「より良い人間社会」と現実——

1. 「より良い人間社会」の根元的三要素

筆者はあるべき人間社会として、「けじめ」「思いやり」そして「厳しさ」を営みの根元とする社会を思い描いている。時代や環境により、世相に違いが生じ、人間の行動様態もさまざまに変化するのとは当然である。違いや変化こそ進歩の原動力であることも認める。しかし、その社会が「良い人間社会」であるために、決して変えてはならない普遍的要素が、けじめ、思いやり、厳しさだと考えている。次に、三要素の持つ意味に関し、筆者の見解を申し述べる。

① けじめ

- 自己としての「判断基準と行動規範」に基づく自律的言動範囲を持つこと。
- 「責任と義務」を「権利」に優先させ、公との調和・公への貢献を厭わないこと。
- 日本人として、他国より悔りを受けぬよう、最低限の知徳を兼ね備えること。

② 思いやり

- 他人の痛みを感じる心を持ち、他人に痛みを感じさせない配慮をすること。
- 己の勝利に驕ることなく、敗者へ労りの心を持ち、その復活を支えること。
- 美しさ、優しさに感動を覚える情感をベースに、他を慮る心を有すること。

③ 厳しさ

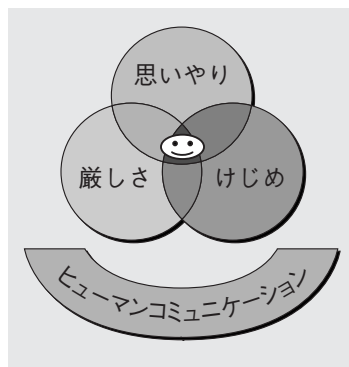
- 反社会的言動に市民的対抗をなし、法以前の「恥の概念」を保持すること。
- 遵法・公德の全国民的精神武装と、法の公平・厳正な執行を実現すること。
- 己の置かれた立場を認識し、他を頼まず、自立してその責を全うすること。

2. 根元的三要素の欠如と憂況的社会現象の因果関係

前号に記した「憂うべき現象」を思い起こして、それらの現象と前述の三要素を対比していただきたい。すべての現象が、三要素のいずれか、または複合的欠如により発生していると言えないだろうか？

学校教育の面を例にとって見れば、「厳しさと

けじめの欠如」が学級崩壊を、「けじめと思いやりの欠如」がイジメを、「思いやりと厳しさの欠如」が聖職意識喪失



を、「厳しさ、けじめ、思いやりの欠如」がPTAの跋扈を…こんな因果関係が描けるであろう。

逆に言えば、国民一人一人の心に、この三要素が涵養されれば、「より良い人間社会」の実現に近づくことができると思う。そのための前提として欠かせないのが、ヒューマンコミュニケーションであることは言うまでもない。

3. 憂況的社会現象を産み出した責任と義務

ここまで述べた「あるべき姿」と「目の現実」の乖離を産み出した責任は、どこにあるのだろうか？

それは若者を批判し、現況を憂える「われわれの世代」にあると言わねばならない。われわれ世代は、戦後復興からバブル経済へと、ただひたすら走ってきた。“今”を良くさえすれば、子供たちの明るい未来に繋がると思いながら…。しかし、それが単純な楽天主義と誤謬であったことを現代の若者により証明され、バブル崩壊と相まって、茫然自失の躰となったのである。「子供の将来のため」と言いながら、実は「子どもを置き去り」にしてきたと言えるだろう。兎にも角にも、一刻も早く落胆から立ち直り、われわれ世代の始動で“若者のバリューアップ”を図らねばならない。それが、われわれ世代に残された最大の義務であろう。

若者に日本の将来を託せるよう、ヒューマンコミュニケーションをベースとした、思いやり、けじめ、厳しさの「より良いトライアングル社会」を築いていきたいものである。そのためのプログラムを、次号（最終回）で提案するつもりである。

●執筆略歴

元(株)東芝勤務、現在はNPO活動中